

「わたしのお父さん」 創世記 22 : 1 ~ 24

I 導入部

おはようございます。6月の第三日曜日を迎えました。今日は、第二礼拝においては、教会学校の子どもたちとの合同の礼拝です。共に心を合わせて私たちの救い主であるイエス様を賛美、礼拝できますことを感謝致します。

今日は、父の日です。日頃のお父さんの労が報われる日であってほしいと思います。2018年度のサラリーマン川柳の入選作を紹介いたします。

記憶にない 夫のどこに ほれたのか	パパ来てよ 必要だったの 指紋だけ
妻いない この日は朝から プレミアム	俺ん家も 長期政権 嫁一強
嫁からの 返事はいつも 既読だけ	禁煙し それでも家で 煙たがれ
売り言葉 買って二倍に 返す妻	年ごとに 妻とスーツが きつくなる
AIに 翻訳させたい 妻の機嫌	減量の 決意はいつも 満腹時
一日の 嫁との会話は 9秒台	

とにかく、今日は父の日です。お父さんを大事に、お父さんを喜ばせてあげてください。今日は、父の日でもあり、創世記 22 章 1 節から 14 節を通して、「わたしのお父さん」という題でお話し致します。

II 本論部

一、罪からではなく神様から来る苦しみがある

アブラハムという人物は、信仰の父と言われる人です。それは、今日の箇所である信仰を試され、神様に忠実に従ったことからきているのだと思います。アブラハムとサラの夫婦には、なかなか子どもが与えられませんでした。現代では、不妊治療というものがあり、子どもが欲しい夫婦のための治療等があります。アブラハムは自分たちには、子どもが与えられないので、自分の全財産を他の者に相続させようと考えておりましたが、神様はアブラハムとサラの間に子供が生まれ、跡を継ぐことを約束されました。そして、アブラハムに子どもが与えられたのは、彼が100歳、妻のサラが90歳の時でした。神様が不可能を可能にして下さった出来事でした。100歳にして生まれた子どもイサクはアブラハムにとっても、サラにとっても大切でかわいくて仕方のない存在でした。孫、いやひ孫のような存在で、イサクの存在は二人にとってかけがえのない存在でした。

ところがです。22章の1節には、「神はアブラハムを試された。」とあります。リビン

ゲバイブルには、「**神様はアブラハムの信仰と従順をテストなさいました。**」とあります。

神様の呼びかけに、アブラハムは「はい」と答えました。神様とアブラハムとの関係が良い事を示しています。夫婦の間でも親子の間でも、呼びかけにすぐに答えるという良い関係が必要です。「**一日の 嫁との会話は 9秒台 嫁からの 返事はいつも 既読だけ**」はあまりよくない関係かも知れません。

神様は、大切に、大切にしてきたイサクを焼き尽くす献げ物としてささげるようにと言われたのです。「**あなたの愛する独り子イサク**」と神様は、アブラハムがイサクを愛していたことをよく承知の上で、なおイサクをささげるようにと言われたのです。

アブラハムが神様の前に罪を犯したからイサクをささげよ、ではありません。アブラハムに何か問題があって、イサクをささげるようにではないのです。神様とアブラハムの関係は良いのです。神様の呼びかけにすぐに答えることができたアブラハムでした。ですから、アブラハムがイサクをささげるというのは、神様の懲らしめではないのです。

旧約聖書に出てくるヨブという人物も、大きな苦しみを経験しました。自分の子ども7人と家畜の全てを一瞬のうちに奪われました。そして、彼の身体には気が狂いそうなかゆみが与えられました。それは、ヨブが罪を犯したり、神様を怒らせるようなことをしたからではありません。神様ご自身ヨブのことを、「**無垢な正しい人で、神を恐れ、悪を避けて生きている**」(ヨブ 1:8) とヨブのすばらしさをたたえておられるのです。

自分が罪を犯したから、自分の問題の何かで、苦しい事や辛い事が起こるならば、まだ、納得をしないまでも理解できるかも知れません。けれども、自分には何も問題がないのにもかかわらず、試練を受けることは、大きな苦しみののではないのでしょうか。

私たちも、神様との関係は良好なのに、苦しい事や悲しい事を体験することがあるのかも知れません。それは、神様の側からのもの、神様から出たものなのです。

二、苦しみの先に神様のお心がある

アブラハムの心境を聖書は何一つ語りません。次の朝早く、イサクをささげるための準備をせつせとこなすのです。逆に、とんでもないことを神様から命令されて、素早く立ち居ふるまうアブラハムの姿に悲哀を感じます。その心には、いろいろな葛藤があったのでしょう。なかったとしたら、人間ではありません。やっとのことで与えられた独り子、大切なイサクを殺してささげるなんてできるはずがない。どうして、神様は、自分がイサクを愛していることを知りながらも、殺してささげよと言われるのか。アブラハムは弱さを持ち、失敗を繰り返しながらも、神様に従順に従って来ました。自分の生き方に何か問題があったのか。何か罪を犯したのだろうか。イサク自身に罪があるのか。何か問題があるのか。このような厳しい命令を神様がなさる理由は何だろうか。アブラハムは、考えに考え、心痛めたであろうと思うのです。

私たちは、自分自身や愛する者に問題が起こると、不幸が起こると心痛めます。それが、愛だからです。アブラハムは、言葉では一言も発しませんが、心は揺れ動いていたのだと思うのです。アブラハムはイサクと二人の若者を連れて出かけ、神様がイサクをささげるようにと指定されたモリヤの山が見えました。そこで、二人の若者に、アブラハムとイサ

クは、あそこで礼拝をしてまた戻って来るので、ここで待つようにと言うのです。

そして、アブラハムとイサクはモリヤの山に向かうのでした。イサクは焼き尽くす献げ物に用いる薪を担ぎました。アブラハムは、火と刃物を手に持ち、彼とイサクは沈黙のまま歩きます。イサクは犠牲の動物を用意していないことに気づいて尋ねます。「わたしのお父さん」と呼びかけるとアブラハムは「ここにいる。わたしの子よ」と答えます。ここにも、親子の良い関係を見ることができます。「火と薪はここにあります、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか。」と尋ねます。「その犠牲の動物はおまえだ」と言えませんから、「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」と答えたのでした。神様が必ず与えて下さると信じたのです。

淡々と神様のご命令に従おうとする父アブラハムの態度に、ただならぬものを息子のイサクは感じたのかも知れません。思っていることがすぐに顔や態度に出る人がいます。全然、表面には出ない人もいます。アブラハムの場合はどうでしょう。今まで神様が語られたことを忠実に従ってきたアブラハムですが、今回の命令だけは、そう簡単には従えそうにはない。けれども、神様のご命令に従おうとするアブラハムの苦闘をイサクはそばにいて感じていたのかも知れません。そして、献げ物の小羊がないという状況の中で、父に尋ねた。「わたしのお父さん、わたしの子よ」という二人の親子の会話にただならぬものを感じつつ、両者ともイサクは父を信頼し、アブラハムは神様を信頼する姿が、ここに現れているように感じるのです。

私たちも神様を信じる者です。けれども、時には神様の語られることが、神様のなさることが理解できないことがあるのです。全能なる神様のなさることを私たち人間は理解できないことがあるのです。しかし、神様は、ご自分の権威の中で、最善のことをなさろうとしておられるのです。アブラハムにとっても、イサクにとっても、そして、困難や苦しみを経験する私たちにとっても同じなのです。

三、神様は全てを配慮し備えて下さる

アブラハムは、神様が命じられた場所に着くと、祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せたのです。息子イサクを縛っての「縛る」とは、神様に献げる犠牲の動物の足をひもで結び付ける行為だそうです。

先ほど、イサクが「火と薪はここにあります、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか。」と尋ね、「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」と答えた父アブラハムは、自分を縛り焼き尽くす献げ物にするのです。ある注解書には、イサクは、この時30歳前後であると書いていました。ですから、130歳前後のアブラハムに抵抗することもできたはずですが、逆に、イサクがアブラハムを縛り付けることもできたはずですが、イサクは父アブラハムのなすがままに、レットイットビーです。

イサクもうすうす感じていたかも知れない。父アブラハムは、二人の若者に、自分と息子は礼拝して、戻って来るという言葉を信じた。父アブラハムが自分を犠牲の動物として神様に献げようとするには、何か理由があるはずだと父を信じたのではないのでしょうか。

アブラハムが困難な要求をされた神様を信じて忠実に従ったように、イサクもまた、父、

アブラハムが自分に理不尽な事をしようとする事柄を受け止めて、父を、そして、神様を信じたのではないのでしょうか。

アブラハムがイサクを献げた場所、モリヤの山はエルサレムです。現在、エルサレムの黄金のドームが建てられている場所であったと言われていています。その同じ場所、エルサレムにおいて、イエス・キリスト様は十字架につけられたのでした。イエス様は、十字架の上で、「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。**」(マタイ 27:46)と祈られました。最後には、「**父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。**」(ルカ 23:46)「**成し遂げられた**」(ヨハネ 19:30)と叫んで死なれたのでした。

イエス様は、父なる神様とひとつでした。その父なる神様から見捨てられた。そして、そのことが私たちの救いとなるのです。罪のないお方、神であるお方、イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架について、尊い血を流し、命をささげて下さったので、私たちの罪が赦され、イエス様がよみがえることによって、死んでおしまいではなくて、死んでも生きる命、永遠の命が与えられたのです。このイエス様の十字架と復活を、心を開いて受け入れたいと思うのです。イエス様は、父なる神様に全幅の信頼を置いて歩まれたのです。そして、十字架こそが、自分の苦しみが全世界を救うことを理解しておられたのです。

アブラハムが、イサクを殺そうとした時、神様はアブラハムに呼びかけ、イサクに手を下してはならない事を言われ、アブラハムが独り子を惜しまずにささげたことを理解されたのです。神様は、イサクの代わりに一匹の雄羊を備えて下さり、焼き尽くす献げ物としてささげることができたのです。アブラハムはこの場所をヤーウェ・イルエ（主の山に備えあり）と名付けたのでした。主は、全てを備えていて下さるお方なのです。私たちのためにも、主は備えていて下さるのです。そのことを信じたいと思うのです。

Ⅲ 結論部

神様は、アブラハムを試される前から、このような結果がわかっておられたのだと思います。ですから、神様がアブラハムを試された理由は、彼が神様に従うかどうかを知りたかったのではなく、アブラハムが神様に従うかどうかをアブラハム自身に示そうとされたからではないのでしょうか。そのためには、アブラハムにとって、一番大事な、かけがえない独り息子イサクによってしか、この試みの意味はなかったのです。妻のサラではなかったのです。

神様は、私たちの最も大切なものを通して、試みられるということがあるのかも知れません。それは、私たちを悲しめるだけのためではない。絶望を与えるためだけではなく。私たちを救い、私たちの信仰を祝福するためであるのです。イエス様さえも、私たちを救うために、尊い血を流し、命をささげて下さったのです。

お父さんは、家族のために、家族を愛するがゆえに、自分を犠牲にして働いて、苦勞しています。そのお父さんの苦勞に感謝して、その愛と犠牲に感謝して、「**わたしのお父さん、ありがとう**」と感謝の気持ちを現わそうではありませんか。この週も愛の神様に支えられて、この神様をどこまでも信頼して歩んでまいりましょう。